

非行危険性についての BSAG の妥当性に関する研究

—学校における行動観察による非行性の予測の調査について—

一 谷 彊 ・ 林 勝 造

A Study of Prediction of Delinquency from Non-Delinquent
Behavior by BSAG (Bristol Social Adjustment Guides)

By

Tsuyoshi ICHITANI and Katsuzo HAYASHI

Received November 17, 1966

問題および目的

中学生の非行が増加するとともに、その対策として、早期発見、早期指導の必要が強調されている。しかし、現実には早期発見の方法はいまだに確立されていない。

その主な理由は、非行の原因や発生の動機が単純ではないからである。非行の原因と考えられる素質や環境について、その内容を分析究明するだけでは充分ではない。それらは相互に重なり合っている条件のひとつひとつとして重要であるが、それとともに、現実の人間の行動や動機を理解するためには、そのような行動様式をとった個人の人格構造を理解することも必要である。

行動の基本としての人格を理解するためには、検査や観察によって、表面の意識にのぼった面だけではなく、もっと深部の構造、無意識の衝動や欲求に対する反応を精神力動的にとらえることが必要となる。そのための方法として諸種の投影法があるが、それを使いこなす専門的知識と技能とを、今の時点で学校の教師に求めることには多分の困難が予想される。

科学的で有効な方法が確立されていない中で、非行は増加し、教師はこれを発見し、指導しなければならない立場にある。学校において現実になされているのは、生徒指導や補導の系の教師の経験に依存するところが多い。実践によって生まれた経験はたしかに鋭く、地についたすぐれた面を持っている。同時に、それは主観的であり、一般化されない欠点をも有している。そのために一部の教師の専門的ないしは請負的な活動になるきらいがあり、従って、問題が困難になると、教師集団の考え方や態度が不一致になり、指導が混乱することにもなる。

非行生徒の指導の際に基本的に重要なことは、教師集団の指導、態度が一致していなければならないということである。生徒の人格に対する正しい認識と、欲求に対する理解を深めるための教師の共同の思考の中から、指導の方法論が具体的に決定されねばならない。

すべての教師の日常的教育活動として実施可能な非行性の早期発見の方法のひとつとして、Stott, D. H. と Sykes, E. G. は学校における生徒の日常行動の観察記録によって非行を予測しようとして、いわゆる BSAG (Bristol Social Adjustment Guides)³⁾⁴⁾を考案した。

この方法は、児童・生徒（5才～15才）に対する日々の行動観察を組織化し、それによって非行性を早期に発見しようとするもので、調査項目は、付表 I のように 142項目あり、それぞれの項目につ

いて非行少年となった者と、そうでない者との出現率を比較し、その差が4倍以上のものを非行性の指標となる項目として抽出すると、その項目数は64項目となった（付表Ⅱの整理用紙に記号の入れてある項目）。

表1 非行点と非行をするチャンスとの関係

非 行 点	非行をするチャンス (100人につき)	非行をしないチャン ス (100人につき)
0～1	0	100
2～3	28.7	71.3
4～5	32.0	68.0
6～7	75.9	24.1
8～9	72.4	27.6
10～11	96.6	3.4
12以上	98.2	1.8

この64項目について、各項目に1点ずつを与え、その合計点を求め（非行点）、それを100人につき非行をするチャンスと非行をしないチャンスを統計的に計算すると、表1のようになる。また、非行性の識別力のある項目（行動）と、その背景となる心理機制との関係を一覧表にまとめたものが表2である。

このような、日常の生徒・児童の行動を教師が観察し、これを評価することによって、如何

表2 非行性の識別力のある項目（行動）とその背景となる心理機制の一覧

記 号	心 理 機 制	非 行 性 の 識 別 力 の 有 る 行 動
W	引 込 思 案	先生に挨拶しない、先生を避ける、先生に対し疑い深い。
XA	大人に対する愛情・関心についての不安	先生に対しておしゃべりすぎる、教室内でいつもちょっとした注意が必要。
HA	大人に対する敵意	先生の注意に対し：自己防衛がつよい、しばしば怒ってブツブツいう、敵対的になる、恨みをいなく、攻撃的に拒否する、時々あざやかなウソをつく。目つき：粗野で敵意あり、上目づかいをする。迷惑な行動：下品な言行、みだらな行動、物をこわす。教室でお金や物を盗む（1、2回、しばしば）、わんぱく、落着きのない子どもとつきあう。
XC	他の子どもに対する不安	グループになると遊んでしまう、馬鹿げたいタズラをする。イタズラに追従する、勇ましすぎる遊びをする、年上の子とあそぶ、遊び人タイプの服装・髪型、公共の物をこわす。
K	大人に対する拒否・無関心	カンニング、人のものをだまて使う、ずるい、よいスポーツマンでない、1人の友だちと長くつき合わない、信用できない、利己的・陰謀家、信頼を悪用する、しつぽをとらえにくい、平気でウソをつく、時々人の顔色をうかがう、人の顔をまともにみない、あつかましい。
HC	仲間に対する敵意	他人の遊びのジャマをする、仲間をおしとばす、口論する、告げ口する、他人のものをかくす、台なしにする、大ていの子と仲がわるい、弱い子に意地悪、他の子からきられる、性悪なケンカをする。
R	忍 耐 力 の な さ	1日で服をひどくよごす、荒っぽい遊び、注意が集中できない、注意してもすぐ忘れる。
M	情緒的緊張障害の徴候	持ち物をそまづに扱う、遅刻や抜け遊びが多い、ずる休み（1～2回、しばしば、その疑い）、年下の子と遊ぶ。
MN	神 経 質 の 徴 候	ひどく爪をかむ、即行的（衝動的）、欠席（半日か1日の休みが多い、長欠）、両親が欠席や仮病を大目にみている、身なりがふけたらけ、汚い。

にそのこどもの非行危険性を早期に発見し、事前に処置を講じることができるとは左右され、かつまた、教師による児童・生徒の日常行動の観察が体系化され、評価されるならば、かなりの客観性をもって、非行への予測を保証するものとなることを示唆するものである。

本研究は、Stott, D. H. と Sykes, E. G. の考案した BSAG が、果たして非行危険性を予測する可能性を有しているかどうかの妥当性の問題を、中学生を対象として、問題行動のあるものとそうでないものについてどの程度に弁別し得るかを吟味しようとする。

方 法

(1) 被験者

京都府下南山城地方の宇治中学、泉ヶ丘中学校、田辺中学、木津中学校、東宇治中学校、男山中学校、笠置中学校、泉川中学校、精華中学校（何れも公立）の9校より、問題行動のある生徒68名と特に問題行動のない生徒226名について、以下に記載するような諸種の検査その他を実施、そのうち、問題行動のある生徒50名、問題行動のない生徒100名を無作為に選択し、これを対象として結果をまとめることにした。対象生徒は男子のみである。

なお、問題行動とは、次の如きものをいう。すなわち、非行や問題行動の考え方については、各学校教師によって異なっているので、調査依頼に際して、現行少年法にいう、① 犯罪少年、② 触法少年、③ 虞犯少年の内容について説明し、さらに具体的に、以下の1～3によって、そのような行為のある生徒を問題行動のある生徒（以下P群という）として、これに該当せず、特に問題のない生徒を非問題行動群（以下N群という）とした。

1. 触法行為……暴行、傷害、脅迫、恐嚇、窃盗、詐欺。
2. 問題行為……兇器所持、乱暴、けんか、たかり、物品持出し、金銭乱費、家出、婦女いたずら、不純異性交遊、不良交友、飲酒、喫煙、不健全娯楽、盛り場徘徊、出席不良（理由もなくずるけて休む）、無免許運転。
3. その他で教師よりみて特に問題があると思われる反社会的行動のあるもの。

(2) 調査方法

次に述べるような調査を、教師または生徒を通して実施した。

(a) BSAG (Bristol Social Adjustment Guides)

“学校における子どもの行動” —教師による生徒の行動観察の調査票—

付表Ⅰに示すような調査票（BSAG）を生徒の担任教師に依頼して記入してもらった。それによって、調査者が、付表Ⅱの行動観察整理表により、先の表2に示されているような内容を持つ記号の付されている項目のみについて得点をとり、非行点を求めた。従って、この非行点は、高いほど非行危険性が高く、低いほどその危険性が少ないことになる（表1参照）。

(b) 知能検査

既に、各学校において、各種の知能検査を、生徒に実施してあったので、その資料に基づいた。知能検査の種類は、学校により多少の相異はあったが、さほどの齟齬はないだろうとの予測のもとに、この資料によった。

(c) 学級集団における社会的地位

付表Ⅲにあるような調査票を該当生徒の担任に配布し、いずれかの該当する項目ひとつに○印を付するように依頼した。

(d) 学習成績

担任教師に依頼して、各被験者の成績を、各教科につき5段階評定の合計点によって報告していただくようにした。中学校の場合は9教科（国語，社会，数学，理科，音楽，体育，図工，職業技術，英語）であり，各教科を5段階評定すれば，最低は9点，最高は45点となる。

(e) 家庭環境（特に親子関係）

付表Ⅳの如き調査票を担任教師に配布，各被験者毎に，該当する項目をひとつ選んで○印を付けてもらうように依頼した。

結果および考察

(1) BSAG における非行点について

N群とP群との非行点の分布を示すと，表3のようになる。Stott, D. H. の提案している非行点と非行をするチャンスとの関係は表1のようになっているので，これに従って，

① 非行点0～1 非行の心配がない A

② 非行点2～5 非行問題をおこす心配がほとんどない B

③ 非行点6～9 非行問題をおこす心配がある C

④ 非行点10以上 非行問題をおこす心配が非常に高い D

のように一応の分類をしてみると，表4のようになる。

これによって明らかなように，非行点の分布は全く対照的であって，統計的にも有意に，P群において非行点が高いことがうかがえる。N群では，Aに属するものが65%で，全体のほぼ2/3を占めており，Bが26%で，ほぼ1/4を占めており，先ず非行問題をおこす心配のないものが91%を占めている。ところがP群では，その逆に，半数の50%がDに属し，非行問題をおこ

表3 非行点の分布

群 非行点	f	問題行動のない生徒群 (N群)		問題行動のある生徒群 (P群)	
		頻 数	%	頻 数	%
0～1		65	65		
2～3		15	15	3	6
4～5		11	11	3	6
6～7		3	13	8	16
8～9		4	4	11	22
10～11				8	16
12～13		2	2	2	4
14～15				11	22
16～17				2	4
18～19				1	2
20～21					
22～23				1	2
計		100	100%	50	100%

表4 非行危険性の分布

区分	非行点	内 容	問題行動のない生徒群 (N群)		問題行動のある生徒群 (P群)	
			頻 数	%	頻 数	%
A	0～1	非行の心配がない	65	65		
B	2～5	非行問題をおこす心配がほとんどない	26	26	6	12
C	6～9	非行問題をおこす心配がある	7	7	19	38
D	10以上	非行問題をおこす心配が非常に高い	2	2	25	50
計			100%	100	50	100%

頻数による χ^2 -検定 $\chi^2=96.0$ $df=3$ $P<0.001$

す危険性の非常に高いことを如実に物語っており、残りの50%のうち、38%は、非行問題をおこす危険性をはらんでいることが示唆される。

ただ、この表からも明らかにみられるように、N群に、非行点10以上で、問題をおこす心配が非常に高いものが2名含まれており、逆に、P群にも、非行点2～5点で、非行問題をおこす危険性の殆んどないものが6名含まれているが、これの具体的な内容や経過について更に研究が望まれる。

このように、BSAG にみられる非行点は、積極的に非行危険性を非非行性から識別する力を持っており、教師の行動観察による評価が客観的に行なわれる場合には、それが有効な非行危険性への予測を可能ならしめることを暗示していると解される。

(2) 非行点と知能との関係

表5は、非行点と知能指数との関係について、その分布を表示したものである。表6は知能指数を上、中、下の3段階に分類して、問題行動のある生徒と、ない生徒とについて頻数分布を示してある。

表5 非行危険性と I. Q. との関係

I. Q.	群 非行点	問題行動のない生徒群 (N群)					問題行動のある生徒群 (P群)				
		A	B	C	D	計	A	B	C	D	計
130～140		6				6					
120～129		9	2			11					
110～119		11	2	1		14			1		1
100～109		15	8	1		24		2	1	4	7
90～99		16	2	3	1	22		1	4	5	10
80～89		4	7		1	12		2	5	10	17
70～79		3	4	2		9			4	4	8
60～69		1	1			2		1	2	1	4
50～59									2	1	3
計		65	26	7	2	100		6	19	25	50
平均		106.9	94.5	93.6	90.0	102.3		90.0	82.4	86.6	85.4
標準偏差						16.9					14.9

N群とP群の知能指数の平均の差 $t=5.993$ $df=148$ $P<0.001$

表6 問題行動と I. Q. との関係

I. Q.	問題行動	問題行動の有無		
		なし	あり	計
上	110～140	31	1	32
中	90～109	46	17	63
下	50～89	23	32	55
計		100	50	150

$\chi^2=29.94$ $df=2$ $P<0.001$

表5からみられるように、非行点の高いP群と、非行点の低いN群との間に、知能指数の平均において統計的に有意な差を示している。表6においても、同様の傾向がみられ、統計的に有意な差をもって問題行動の有無と知能指数との間に関連のあることがうかがえる。すなわち、問題行動のみられる生徒には知能指数の低い「下」の段階のものが多く、表5の知能指数の平均にも明らかのように、問題行動のある群は、平均が85.4であって、この指数は、これま

での研究ともほぼ対応しているものである。知能指数が非行との関係においてみると、かなり有力な要因となることはこの結果からもうかがえる。また、表5に示されているように、N群で、非行危険性と知能指数との関係をみると、A : B : C : D = 106.9 : 94.5 : 93.6 : 90.0 となって、次第に低くなっていることも興味深い。同様に、P群でも、B : C : D = 90.0 : 82.4 : 86.6 となって、多少の非一貫性があるが、徐々に低くなる傾向がある。

(3) 非行危険性と学級集団における社会的地位との関係

表7 非行危険性と学級における社会的地位との関係

学級内の社会的地位	群 非行危険性	問題行動のない生徒群(N群)					問題行動のある生徒群(P群)				
		A	B	C	D	計	A	B	C	D	計
(1) 人気があり信頼を集めている。 委員にもよくえらばれている。		13	1			14		1			1
(2) 普通であり、たいていの級友とうまくやっている。		38	7	2		47		1	2	1	4
(3) 少数の友人でグループをつくっている。 他の級友ともうまくやっている。		9	4			13		2	1		3
(5) 少数の友人でグループをつくっている。 暗い感じで活気がない。		1	3	1		5			3	3	6
(4) 少数の友人でグループをつくっている。 勝手な行動が多く、級友と反撓。			6	2		8		1	8	10	19
(6) 親しい級友がなく、乱暴が多い。きらわれている。		1	4	1	2	8			4	10	14
(7) 親しい級友がなく、いつもひとりでさみしそうにしている。		3	1	1		5					
(8) 学級内に友人は全くないが、他に親しい友人をもっている。								1	1	1	3
計		65	26	7	2	100		6	19	25	50

表8 問題行動と学級における社会的地位との関係

学級内の社会的地位	群 問題行動のない生徒群(N群)	問題行動のある生徒群(P群)	計
すぐれている (1)	14	1	15
普通 (2) (3) (5)	65	13	78
劣っている (4) (6) (7) (8)	21	36	57
計	100	50	150

$$\chi^2=34.11 \quad df=2 \quad P<0.001$$

応の欠如をほのめかしている。

(4) 非行危険性と学習成績との関係

表9は非行危険性と、中学校における9教科の学習成績を夫々5段階評定し、それを合計したもの

表7は、非行危険性が、学級集団内の生徒の社会的地位とどのような関係をもっているかをみたものであるが、これをまとめたものが表8である。これらの表からわかるように、非行危険性の高いものは、一般に学級内でも、その社会的地位が低く、劣っていることがうかがえる。殊に、人気があり、信頼をあつめているものが、皆無といっていいほどの状態である。問題行動と学級内の社会的地位との間には統計的に有意な関係(表8)があり、学級社会への適

によってあらわした成績との関係を示したものであり、表10は、これを上、中、下の3段階に区分してまとめたものである。表9からわかるように、N群とP群との成績の平均の間には、1%水準以下で有意な差があり、N群の方が有意に成績がよい。表10の χ^2 -検定においても、そのことは同様の傾

表9 非行危険性と学習成績との関係

群 学習成績 \ 非行危険性	問題行動のない生徒群 (N群)					問題行動のある生徒群 (P群)				
	A	B	C	D	計	A	B	C	D	計
41~45	3				3					
36~40	14	1	1		16					
31~35	10	3			13					
26~30	22	9	2		33		2	2	4	8
21~25	10	4	1		15		1	4	1	6
16~20	6	6	1	1	14			5	7	12
9~15		3	2	1	6		3	8	13	24
計	65	26	7	2	100		6	19	25	50
平均	29.9	24.0	22.7	15.0	27.7		19.3	17.6	16.7	17.8
標準偏差					7.35					5.52

N群とP群の学習成績の平均の差 $t=8.319$ $df=148$ $P<0.001$

表10 問題行動と学習成績との関係

区分	群 学習成績	問題行動のない生徒群 (N群)	問題行動のある生徒群 (P群)	計
		(N群)	(P群)	
上	36~45	19	0	19
中	21~35	61	14	75
下	9~20	20	36	56
計		100	50	150

$\chi^2=40.875$ $df=2$ $P<0.001$

向をもってうかがわれる。知能指数の低いこととも関係があろうが、「上」に位するものがP群には全くみられない。表9で、P群の非行危険性がDのものに、成績が9~15の範囲におちるものが13名もいることは、学習成績が、非行危険性へのひとつの測度となることを示唆している。学習成績は、知能との相関は高いけれども、必ずしも完全な相関を示さないことから、生徒の意欲や関心が大きく影響することが推測されるが、この結果からみても、上のことを考

慮すれば、非行危険性の高いものには、学習への意欲や関心または興味が、何らかの形で阻害されているものの多いことが予想される。

かくして、学級内での社会的地位、すなわち、特定の生徒の、他の生徒への対処の仕方やそれによって生じる学級内での生徒からの評価が、非行危険性の予測にとって、ひとつの手がかりとなること、が、先の項における結果から暗示されるとともに、学習への意欲や成績もひとつの有力な、非行危険性予測のための手がかりとなることが考えられる。

(5) 非行危険性と親子関係について

家庭における親子関係、殊に親の子どもへの対処の仕方や、子どもへの態度もまた、非行へはしる危険性をはらむひとつの要因と考えられるので、その点について検討を加えたものが、表11である。付表IVでの回答のうち、1に該当するものを民主型、3を、支配、厳格、干渉型、2を溺愛型、4および5を拒否、放任型と大別してまとめてみたものであって、非行危険性の高いものには、その低

表11 非行危険性と親子関係

親子関係 \ 非行危険性	問題行動のない生徒群 (N群)					問題行動のある生徒群 (P群)				
	A	B	C	D	計	A	B	C	D	計
民主型	51	11	3	1	66		2	2	1	5
支配・厳格・干渉型	4	2	2		8			4	2	6
溺愛型	4	7	1		12		4	10	10	24
拒否・放任型	6	6	1	1	14			3	12	15
計	65	26	7	2	100		6	19	25	50

両群における各型の計による χ^2 -検定 $\chi^2=42.03$ $df=3$ $P<0.001$

いものに比して、つまり、問題行動のあるP群が、問題行動のないN群に比して、溺愛型が非常に多いこと、またこれについて、拒否、放任型が多くなっており、反対に、民主型の極度に少ないことがえる。

このことから、家庭における親の子どもへの対処の仕方もまた、非行危険性への大きな測度となることが考えられ、特に、Sheldon Glueck と Eleanor Glueck²⁾とは、社会的な因子による非行予測を進展させていることが注目値する。この方法は、潜在的に非行性を持った少年を早期に発見し、これを教育的に、心理療法的に処理して、少年犯罪を早期に予防することを目的としたものであるが、これを回顧的に利用することも可能となっている。この方法は、子どもの持つ親子関係を評価し、その夫々に失敗得点を与えて、その合計について非行をする確率と、非行をしない確率とを統計的に算出したものであるが、この社会的な因子とは、

- ① 父による少年のしつけ
- ② 母による少年の監督
- ③ 少年に対する父の愛情
- ④ 少年に対する母の愛情
- ⑤ 家族の結合

であって、本研究の結果も、ほぼこれと近似的な結果を示している。

結論および要約

(1) Stott, D. H. と Sykes, E. G. の考案になる BSAG の妥当性について、特に今回は、非行点との関係において、これが、問題行動が現にある生徒と、ない生徒とを、中学2年生の男子、それぞれ50名と100名とを選択して、実施してみた結果では、積極的に有意な差をもって、この方法が、両群の間を識別することが、明らかとなったが、現に問題行動があるのに非行点が低くあらわれ、問題行動が現にないのに、非行点の高くあらわれる生徒が何例も見られたので、これについて今後の研究が必要であることが明らかとなった。

(2) BSAG の補助的手段として、知能指数、学習成績、学級内での社会的地位、親子関係をも比較検討した結果

- (a) 問題行動のある群は、ない群よりも知能指数が有意に低い。
- (b) 問題行動のある群は、ない群よりも学習成績が有意に悪い。

- (c) 問題行動のある群は、ない群より、学校内での社会的地位が有意に低い。
- (d) 問題行動のある群では、ない群よりも、親子関係が民主型といわれるものから逸脱した、溺愛型、放任・拒否型のようにかたよった型のものが有意に多い。

以上のようなことが、明らかとなった。

- (3) BSAG の結果は、遠藤ら¹⁾の研究結果と対応していた。

参 考 文 献

- 1) 遠藤辰雄・橋本重三郎・佐藤寧子・大井典子・山本輝夫 (1964). 少年非行の早期予測に関する研究 第三報 法務総合研究所研究部紀要.
- 2) Glueck, S., and Glueck, Eleanor (1950). Unraveling Juvenile Delinquency. New York, The Commonwealth Fund.
- 3) Stott, D. H. (1960). The Prediction of Delinquency from Non-Delinquent Behavior. Brit. J. Delinquency, 10, 202-210.
- 4) Stott, D.H., and Sykes, E.G. (1956). The Bristol Social Adjustment Guides. Univ. London Press.

(本研究は京都府教育研究所齊藤恪二先生の御協力に依るところが大きい。ここに謝意を表する。)

Summary

1. The purpose of the present study was to analyze the validity of the Bristol Social Adjustment Guides (BSAG) devised by Stott and Sykes.
2. The BSAG was administered to 100 non-problem boys and 50 problem boys. They were all in the second year grade of the secondary schools in Kyoto Prefecture.
3. At the same time, the data of the intelligence test, the performance or the achievement of the school subjects, the social status of the class, and the parent-child relationships of each boy were also collected.
4. The difference of the BSAG's scores between the non-problem group and the problem group was positively and statistically significant. The scores of the problem group were generally higher than the scores of the non-problem group.
5. The scores of the BSAG were significantly related to the I. Q., the school achievement, the social status of the class, and the parent-child relationships.

(付表 I)

調査票（学校における子どもの行動）

〔記入の仕方〕 先学期の子どもの行動や態度について該当する項目があったら、その項目の番号を○で囲んで下さい。もし、その行動や態度が特に顕著な場合には、その番号を◎で囲んで下さい。また、不確実な場合には絶対に○や◎をつけないこと。その他気づいた行動や態度があれば、“その他”の欄に適当な言葉を記入し、そのアタマに○または◎をつけること。もし全くあてはまる点がなければ、必ず“とくに目立つところはない”あるいは“普通”に該当する項の番号を○で囲んでおいて下さい。

学 名	立	学校	調査者氏名
	年 組		
(ふりがな)			
生徒氏名		男 女	
	年 月 日生		
調査期間	年 月から	年 月まで	

(1) 先生に対する態度

(イ) 先生に対する挨拶

1. 馬鹿ていねい（ていねいすぎる）。
2. ある時はていねいだが、ある時はそしらぬふりをする。
3. 挨拶する前に先生から見つけられることを待ち望む。
4. 絶対にしない。
5. とくに目立つところはない。
6. その他。

(ロ) 先生に対する全般的な態度

1. 自然で、快よく笑顔をみせる。
2. 親しすぎる。
3. はずかしそうにしてはいるが、親しくしたいと思っている。
4. 全然親しげな、あるいは、丁寧な反応（返事）をしない。
5. ある時は人なつこく、ある時はきげんが悪い。
6. 全く人を避けていて、あなたも近づけないほどである。
7. 率直でもないし、人なつこさもない。
8. 時々人の顔をうかがっているように思われる。
9. 特に目立つところはない。
10. その他。

(ハ) 先生に対する話し方

1. ふつうにおしゃべりする。
2. 進んで（かくさず）話をする。
3. おしゃべりすぎる（いつもおしゃべりで疲れさせる）。
4. ともしればふさぎこむ、だまりがち。
5. ほとんどしゃべらない。
6. その他。

(ニ) 先生との接触

1. 先生ににじりよったり、ぶらさがったりする。積極的に先生に近づく。
2. 最小限の接触しかないが、他の子どもたちにはしりごみしない。
3. 疑い深い動物のように警戒的。
4. 特に目立つところはない。
5. その他。

(ホ) 先生の注意を向けることに対する好み

1. 賞められることの価値を認めている。
2. 先生を独占したがる。
3. 注意を向けられないと、フイにその場を去る。
4. 関心をもってほしいと思っているが、自分からは進んでできない。
5. 疑い深く、自分を防衛している。
6. 先生の承認や非難に対して無関心。
7. 特に目立つところはない。
8. その他。

(ヘ) 教室内の行儀

1. 行儀がよい。
2. おく病でいたずらができない。
3. 時々いたずらをする。
4. 元気（生气）がない。
5. いつもちょっとした注意（矯正）が必要。
6. 非常にわんぱく、しつけがむづかしい。
7. 口がうまい。ずるい。
8. あつかましい。
9. うぬぼれが強い。
10. 信頼をうまく利用（悪用）する。
11. しっぱをとらえがたい。
12. 特に目立つところはない。
13. その他。

(ト) 誠実さ

1. 常に誠実である。
2. 大体誠実である。
3. おく病のためにウソをつく。
4. 時々あざやかなウソをつく。
5. 習慣的に平気でウソをつく。
6. 空想的な根も葉もない話をする。
7. その他。

(チ) 正直さ（学業）

1. カンニングする、他人の作品をうつす。
2. ふつう。
(教室内・学校内)
1. 無断で、他の子どもの机から本やノートをもってきてしまう。
2. しばしばお金やお菓子や品物を盗む。
3. 一、二回お金やお菓子や品物を盗んだことがある。
4. 全然お金やお菓子や品物を盗んだことはない。
5. その他。

(リ) 融通性

1. 融通が利きすぎる。
2. 融通が全く利かない（頑固、へんくつ）。
3. 特に目立つところはない。
4. その他。

(ヌ) 先生の注意（矯正）に対する態度

1. 年令相応に普通。
2. 泣き出す。

3. しばしば怒ってブツブツつぶやいたり、怒りをブツブツ口に出している。
4. 攻撃的に注意や矯正を拒否する。(絶叫する、おどかす、暴力をふるう)。
5. 主役ぶる。
6. その他。

(ル) 注意(矯正)の効果

1. 前よりよかった。
2. 未成熟なために気をつけない。
3. 落ちつきがないために長い間おぼえていられない。
4. グループになって遊ぶことに抵抗できない。
5. 怨みをいだいている、そして、いつも罰を不公平なものと考えている。
6. 敵対的になる。
7. 寛大さを弱さとしてうけとる。
8. 特に目立つところはない。
9. その他。

(2) 学業に対する態度

(イ) 注意の度合

1. 無関心(ただ出席している)。
2. あえて勉強しようとししない。
3. 夢でも見ているようで気が散っている(別の世界に生きている)。
4. 長い間席についていたり、注意を集中することはできない(読んだり、放送したりしている時にじっとすわってられない、机の下で物をいじったりするなど)、むら氣。
5. すなおだがなまけもの。
6. 特に目立つところはない。
7. その他。

(ロ) 持続度(手工)

1. 仕事をがんばる。
2. すぐに投げ出す。最後までやれない。
3. 短気で、仕事に対して向かっ腹をたてる。
4. 気分次第。
5. 大いに次々と仕事を変えて行く、気移りする。
6. 体力を欠いている。
7. 先生がついていたり、強制したりした時だけ仕事をする。
8. 仕事から心が離れていて無関心。
9. その他。

(ハ) 出来栄えの水準(手工)

1. よい出来栄えあるいは普通の出来栄え。
2. 非常に変化が多い(時々わざと下手にやっている)。
3. 拙足でぞんざい。
4. その他。

(3) ゲーム・遊び

(イ) チームでやるゲーム

1. チームとよく調和している。
2. 負けっぶりがよくない(ゲームが自分の思いどおりに行かないと大さわぎをする)。
3. よいスポーツマンでない(自分のためにだけゲームをする、ズルをする、不正をして妨害する)。
4. 屈従的で、誰も余り望まないような役、たとえば球拾いなどをひき受ける。
5. 勇ましすぎる(不必要な危険を冒す)。
6. おく病で、気はくになしい、思い切ってやることができない。
7. ふつうの勇氣をもっている。

8. その他.

(ロ) 課業外の遊び

1. 活動的な遊びには尻込みする.
2. 年令の割に子どもじみた遊びをする.
3. 健康的に騒がしく, 荒っぽい.
4. なぐりあいや荒っぽい遊びで他人をびっくりさせる.
5. 他人のゲームのじゃまをしたり, いじめたり, おどかすのが好き.
6. 特に目立つところはない.
7. その他.

(ハ) 個人でやるゲーム

- a {
 1. 負けっぷりがよい.
 2. 負けっぷりがよくない.
- b {
 1. 正直.
 2. ずるい, 不正直.
- c {
 1. 坐ってやるゲームが好き (碁, 将棋など).
 2. 落ちつきがない.
 3. 特に目立つところはない.

(4) 他の子どもに対する態度

(イ) 仲間づきあい

1. 交際上手.
2. ただ一人の子どもとだけつきあい, 大てい他の子どもを無視する.
3. よそよそしく, 他の子どもたちを避けている.
4. 時々ひとりポッチでブラブラ歩きをする.
5. 一人の友だちと長くつきあうことができない (新しい人とすぐに仲よくなろうとする).
6. 遊び仲間のグループに入れてもらおうと一生懸命になりすぎる (取り入ろうとしたり, へつらったり, すぐにさそいにのったり, 関心のマトになりたがる).
7. 大ていの場合, 他の子どもたちと仲が悪い.
8. 特に目立つところはない.
9. その他.

(ロ) 他の子どもたちに対する接し方 a

1. 他の子どもたちと仲良くやっている.
2. 全般的にいて親切, 助けになってやる.
3. 自分の仲間以外の子どもたちには, 時々意地悪.
4. 口論したり, 侮辱的なことをいう.
5. 利己的で, 陰謀家で, 他の子どもたちの楽しみをじゃまする.
6. 皮肉ばかりいう.
7. 押しとばしたり, 打ったりして傷つける.
8. 自分より弱い子に意地悪.
9. 告げ口したり, 卑劣なところがある (他の子どもたちが叱られるように試みる).
10. 特に目立つところはない.
11. その他.

(括弧内の該当する性別に○をつけて下さい) b

1. 主として年上の子と遊ぶ, あるいは年上の子とだけ遊ぶ (男, 女, 両方).
2. 主として年下の子と遊ぶ, あるいは年下の子とだけ遊ぶ (男, 女, 両方).
3. 主として同年輩の子と遊ぶ, あるいは同年輩の子とだけ遊ぶ (男, 女, 両方).

(ハ) 身体的な勇敢さ

1. 決して争わない.
2. 屈せずにたたかう.

3. 弱いものいじめをする。
4. 勇敢な態度をとるが、尻込みをする。
5. 挑発されると怒り出す。
6. 性悪な喧嘩をする（噛みつく、ける、ひっかく、武器として危険なものを使う）。
7. 向こうみず、無鉄砲。
8. 特に目立つところない。
9. その他。

(ニ) 他の子どもたちの態度

1. 好かれている。
2. 嫌われている、避けられている。
3. 境界線のところにいるが、どちらかという仲間外れにされている。
4. 落着きないタイプのものが大体つきあっている。
5. だまされたり、愚弄されている。
6. その他。

(5) 生活習慣

(イ) 出席状況

- a 1. 良好。
2. 1日あるいは半日の休みが多い。
3. 長欠。
- b 1. 1～2回ずる休みをした。
2. しばしばずる休みをした。
3. ずる休みをしているらしい。
- c 1. 両親が欠席を大目に見ている。
2. 両親が仮病などを大目に見ている。
3. 両親（家業、家事、家計）を助けるために休んでいる。

(ロ) 時間の守り方

1. 良い。
2. かなり良い。
3. しばしば遅刻する。
4. 授業から抜け遊びをする。
5. その他。

(ハ) 持物

1. 本などの持物によく気を配っている。
2. 不注意、だらしない、失くしたり、忘れたりする。
3. そまつに扱う。楽書きなどで汚す。
4. その他。

(ニ) 学級の仕事に対する能力

1. 気が利いている。
2. 気が利かず無気力で役に立たない。
3. そそっかしい。
4. 信用できない。
5. 気分屋。
6. 行きあたりばったり（のんき、無責任）。
7. 愚鈍そのもの。
8. 特に目立つところはない。
9. その他。

(ホ) 身なりに対する注意

1. 遊び人（愚連隊、殺し屋、マンボ族など）タイプの服装、髪型。

2. 身なりにそれほど気を配らない，無頓着，だらしがない。
3. ふけだらけ，汚ない。
4. 一日で非常に汚してしまう。
5. 年齢相応にこざっぱりして，きちんとしている。
6. 特に目立つところはない。
7. その他。

(へ) 目つき

1. 鈍い，無関心な目つき。
2. 反応がない（貴方の方を見ていないように思われる）。
3. 貴方をまともに見ることができない。
4. 粗野で敵意のあるまなざしをしている。
5. 上目づかいをする。
6. まばたきをする。
7. 明るい，輝いている。
8. 特に目立つところはない。
9. その他。

(ト) 落ちつきなさなど

1. 無意識的なけいれんがある。
2. 目的もなく手を動かしたりする。
3. ひどく爪をかむ。
4. 神経質でビリビリしている。
5. 指をしゃぶる（10才をすぎているのに）。
6. たえずくすくす笑っている。
7. 始終じっとしていない。いつもやきもきして両手を動かしている。
8. 即行的，衝動的。
9. 注意散漫。
10. 特に目立つところはない。
11. その他。

(チ) 迷惑な行動

1. 公けの（学校，駅，公園などの）財産（建物，垣根，芝生など）をこわしたり損害を与える。
2. 私有財産（自動車，自転車，荷車，家屋，庭など）をこわしたり損害を与える。
3. 集団でいると馬鹿げたいたずらをする。
4. いたずらの追従者となる。
5. 他の子どもたちの物を台なしにしたり，かくしたりする。
6. 悪い言葉を使ったり，下品な話をしたり，歌を唱ったり，絵を書いたりする。
7. みだらな行動をする。
8. 特に目立つところはない。
9. その他。

(附表Ⅱ)

行 動 観 察 整 理 表

		校名		氏名					
W=Withdrawal	(1)(イ) 1	(へ) 1	5 XC	5 XC	9 HC	3	(ト) 1		
XA=Anxiety or uncertainty about adult interest and affection	2	2	6	6	10	(ロ) 1	2		
HA=Hostility to adults	3	3	(ル) 1	7	11	2	3	MN	
K=Attitude of unconcern for adult approval and writing off adults	4 W	4	2	8	b1 男	3	M	4	
XC=Anxiety for approval of and acceptance by other children	5	5	3	(ロ) 1	女	4	M	5	
HC=Hostility to children	6	6 HA	4	2	両	5		6	
R=Restlessness	(ロ) 1	7 K	5 HA	3	b2 男	(ハ) 1		7	
M=Miscellaneous symptoms of emotional tention, strain or disturbance	2	8	6 HA	4 R	女	2		8	
MN=Miscellaneous nervous symptoms	3	9	7 K	5 HC	両	3	M	9	
	4	10 K	8	6	b3 男	4		10	
	5	11 K	9	7	女	(ニ) 1		11	
	6 W	12	(2)(イ) 1	(ハ) a1	両	2	(チ) 1	XC	
	7 K	13	2 K	2	(ハ) 1	3	2	HA	
	8 K	(ト) 1	3	b1	2	4	K	3	XC
	9	2	4	2	3	5		4	HC
	10	3	5	c1	4	6		5	XC
	(ハ) 1	4 HA	6	2	5	7		6	HA
	2	5 K	7	3	6 HC	8		7	HA
	3 XA	6 XA	(ロ) 1	(4)(イ) 1	7	9		8	
	4	7	2	2	8	(ホ) 1		9	
	5	(チ) 1	3	3	9	2			
	6	2	4	4	(ニ) 1	3			
	(ニ) 1 XA	教 1 K	5	5 K	2 HC	4	R	W	
	2	2 HA	6	6	3	5		K	
	3 W	3 HA	7 K	7	4 HA	6		XA	
	4	4	8 W	8	5	7		HA	
	5	5	9	9	6	(へ) 1		XC	
	(ホ) 1	(リ) 1	(ハ) 1	(ロ) a1	(5)(イ) a1	2		HC	
	2 XA	2	2	2	2	3	K	R	
	3	3	3 R	3	3	4	HA	MN	
	4	4	4	4 HC	b1	5	HA	N	
	5 HA	(マ) 1	(3)(イ) 1	5 K	2	6		U	
	6	2	2	6	3	7		D	
	7	3	3 K	7 HC	c1	8		PS	
	8	4 HA	4	8 HC	2	9		PD	

付表Ⅲ

生徒氏名	学校名	学年
学級集団における本人の地位に対する調査		

該当する項目のいずれかひとつに○印をつけて下さい。

1. 人気があり、信頼を集めている。委員によく選ばれている。
2. 普通であり、大ていの級友とうまくやっている。
3. 少数の友人でグループをつくっている。他の級友ともうまくやっている。
4. 少数の友人でグループをつくっている。勝手な行動が多く、他の級友と反撥することが多い。
5. 少数の友人でグループをつくっている。その生徒らは暗い感じで活気がない。劣等感が強い。
6. 親しい級友がなく、乱暴なことが多い。きらわれている。
7. 親しい級友がなく、いつもひとりでさみしそうにしている。
8. 学級内に友人は全くないが、外では親しい友人をもっている。

付表Ⅳ

生徒氏名	学校名	学年
家庭のあたたかさや子どものしつけの方法について、担任としてみた場合、次のどれにあたるか、ひとつ選んで○をつけて下さい。該当するものがなければ具体的に書いて下さい。		

1. 愛情は深い、子どもの独立性は尊重されている。強制的な方法をとらず、子どもが積極的に行動するようにされている。
2. 愛情はあるが理知的でなく保護しすぎる。子どもの要求は盲目的に満足させている。
3. 愛情はあるが、子どもの自主性は尊重されていない。命令によって服従させている。
4. 子どもに対する愛情が欠けつめたい。叱責が多く、拒否的な傾向がつよい。
5. 無関心であり、また、しつける意欲も力もないので放任されている。